



# 館長だより

山形県産業科学館

令和 6 年 1 2 月 1 日(日)

発行 館長 加藤 智 一

## 新しい時代に贈る「賢者の贈り物」

## 12月1日は映画の日



皆さんも一度はこの話しを聞いたことがあるのではないのでしょうか。毎年クリスマスの頃になると、テレビやラジオで語られることが多い作品であり、オー・ヘンリーの代表作となった短編小説「賢者の贈り物」。簡単にあらすじをおさらいしてみましょう。

貧しいジェイムズ・ディリンガム・ヤング夫妻が、お互いにクリスマスプレゼントを買うため、お金の工面をします。夫のジムは、祖父と父から受け継いだ金の懐中時計を大切にしていました。妻のデラは、その金時計を吊るすプラチナの鎖を贈り物として買うかわりに美しい髪をバッサリ切り落とし、売ってしまうのです。一方夫のジムはデラが欲しがっていた鼈甲の櫛を買うために、自慢の懐中時計を質に入れてしまったのでした。ざっとこんなお話です。

久しぶりにこの話しを聴いて、私は、SDGs との共通性を考えずにはいられませんでした。今ではすっかり万民の知るところとなった SDGs。SDGs (持続可能な開発目標) とは、「2030 年までに達成すべき 17 の目標」(Sustainable Development Goals) の略称であり、2015 年 9 月に国連で開かれたサミットの中で世界のリーダーによって決められた、国際社会共通の目標です。誰ひとり取り残さないことを目指し、先進国と途上国が一丸となって達成すべき目標で構成されているのが特徴です。

「賢者のおくりもの」に登場する妻のデラと夫のジムは、お互いに相手を思いやり、相手にとって最高の贈り物をしようとしていました。幸せの尺度を物量で判断するならば、二人の行動は愚かな行き違いに見えますが、来年のクリスマスあるいは数年後のクリスマスまでには必ず結実するであろうと信じて喜びを分かち合えるその気持ちは、決して愚かではありません。

10 年後の未来が、全人類にとって希望に溢れる世界であるために、皆さん一人ひとりが、今、賢者となって未来の人類のために、贈り物を準備しようではありませんか。

1896 年、神戸において日本で初めて映画が一般公開されたのを記念して、1956 年に日本映画連合会(現日本映画製作者連盟)が 12 月 1 日を「映画の日」と決めました。120 年以上前のことですから当時は絵が動くだけでもさぞかしビックリした事でしょう。勿論音はありません。ですから無声映画(サイレント)です。サイレント映画は日本だけでなく世界中で制作され鑑賞されました。1900 年代初頭から 1920 年代にかけてのお話です。ただ日本では、独自のサイレント映画文化がありました。特徴的なのは「弁士」と呼ばれる解説者の存在です。弁士は映画の内容を観客に解説し、物語をわかりやすくするために活躍しました。上映に際してはオーケストラやバンドによる音楽伴奏が付くことも多く、徳川夢声といった人気弁士も現れました。ところが、「弁士」のような役割は、他国では一般的ではなく、日本特有の鑑賞方法だったようです。日本独特と言えば、私達が当たり前と思っている外国映画でお馴染み「字幕」も日本特有の文化らしいとのこと。海外では外国映画に字幕が付くことはあるけれど、吹替が主流なのだそうです。そう考えると、新聞からの情報ではありますが、先日エミー賞に輝いた「SHOGUN 将軍」は、台詞の 70%が日本語で、これに英語の「字幕」をつけたそうですが、ある意味「冒険」だったのだと思います。私はネット予告で観ただけですが、いつ山形の劇場に来るのでしょうか。楽しみです。

